

言語習得過程についての人間関係学的研究

(言語・発達臨床論) IV

関係の評価とかかわりかた*

佐々加代子

序

乳幼児の言語習得過程については、Ⅲ報⁷⁾¹¹⁾¹³⁾までの間に、筆者の言語発達臨床仮説に基づいて、新生児期からのさまざまな子どもたちとの縦断研究成果をふまえた上で、とりわけ人間関係との関連性に注目してそのメカニズムの解明を意図してきた。人間関係の質の要因によって早期に言語を含めた初期発達が促進されること、生物学的な阻害要因が多い場合でも人間関係の要因によって言語発達の初期のキャッチボールである、T信号行動系による交信が可能になる、ということを明らかにしてきた。T信号行動系交信からV信号行動系交信、さらに先では成人言語につながっていくA信号行動系交信へと連なっていく内容は、筆者が「ことば」を三種類の信号行動系として位置づけ、従来の概念より幅を広げてとらえてみることによって明確になってきた。ことばの、いわばキャッチボールのしくみは、生物学的成長がまだ未熟な初期に成立すること、その時期に当り前のようになされてきていた距離ゼロm内で行なわれていた育児行動によって、子どもがさらなる信号行動系の発信・受信の手段を学びとる手だてが隠されていた、ということである。

現代の日本の社会状況の中での育児は、その原理からみるとかなり方向を見失っているように思われる。人間関係の歪みや未熟な子どもたちがふえているというのはその意味ではうなづけることでもある。Ⅲ報ではほんの些細なくい違い（そご）によっても人間関係の歪みが大きくなるということも明らかにしてきたが、子育てのあり方にさらにそのような些細なそごが加わると、子どもの側に発達の基盤となる人間関係の育ちの歩みはさらに遅くなる、ということになる。

本論では、このような状況をふまえた上で、人間関係の育ちそびれ、或いは歪みについての評価と人間関係修復のためのかかわり方の技法についての検討とする。 **

I. 人間関係の育ちそびれ或いは歪みについての評価

1. 関係の評価

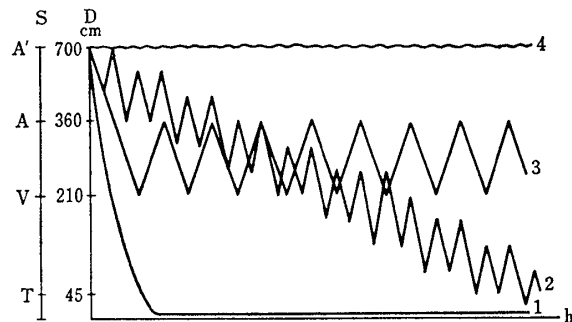
個人間コミュニケーションでおさえる。臨床者と子ども、母親と子ども、父親と子ども

* この研究は、平成4年度（継続）文部省科学研究補助金一般研究（C）萌芽的研究（課題番号02808017）及び1992～1993年度白梅学園短期大学研究助成金の一部によるものである。

** 平成2年～4年度までに研究補助金を受けた研究成果の報告書として文部省に1993年7月末日に提出したが、本論はさらにつけ加えてまとめたものである。

も、というように子どもをとりまく関係者について、一対一の関係をおさえてみる。それぞれの間に交わされている内容を、筆者の距離—信号行動系を見ながら、発信と受信という関係；即ち、ことばのキャッチボール⁸⁾の交換過程をみる。人間関係の歪みと思われる子どもたちは、私たちとは心理的にも物理的にも距離が遠い。(接近過程の類型 図1)

この場合、T信号行動系ではなく、V・A信号行動系の出しかたをみるということになる。とりわけ、V信号行動系の内容は、子どもからの、向くことや向かうことについてみてみるとわかりやすい。視線が合うとか避けているかどうかということが手がかりになる。子どものまわりの人たちのなかで、どの人が一番近くにいるのかということを見ていく。あくまでも、子どもの側からみていく、ということである。



h : hour, D : Distance, S : Signal behavior
1. 密接型, 2. 漸接型, 3. 振幅型, 4. 遠方定置型
図1. 接近過程の類型 (佐々, 1985)

出会った子どもたちの子どもの発達を評価するとき、子どもの成長のプロセス (I 報, 図 I, p26) についてみる。暦年齢が高ければ高い程に、歪みを感じる子どもの場合には、生物学的要因 (B) 方向にひっぱられた発達ベクトル (D) に偏っているということが考えられる。

人間関係の育ちそびれは、その子どもの発達過程における、とりわけ人間関係 (III 報, 表 1, p17) の内容をみてみるのが評価となる。筆者の母子 (人間) 関係成立段階のどの段階にいるのかということ具体的項目からチェックしてみることで判別が可能である。

順調に母子関係の段階を重ねていく子どもたちの場合には、表 1 の上段から下段にすすむにつれて一番身近な (子ども本人がランク付けをしていくものとしておさえておく) 母親 (保育者) に向かう力が徐々に強くなり、かなりの高まりがある。向くこと、向かう力だけではなく、あと追い (following) に代表されるように、母親 (保育者) との距離間を限りなくゼロ m にしようとする動きがある。これは保育者を自分に向かせることや向かわせるようにする力そのものがもてるようになってきているということを意味する。

未熟さが目立つ子どもの場合には、向くこと、向かうことに代表されるように、保育者や人に対して発揮する力が弱々しい。三種類の信号行動系発信における、とりわけ、V 信号行動系の内容 (見つめること) や A 信号行動系の内容 (聞きとめて理解する) の発信・受信力が弱い、ということになる。未熟のゆえんがここにある。

一方、人間関係の歪みの子どもの場合を考えてみる。はじめに向くこと、向かうことなどについてはどのような信号行動系発信をしているのだろうか。歪みの結果として意味づけられる行動群を見る。どのような内容なのであろうか。それらの行動群を「なぜするのか」ということでみる。その子どもはいつごろから獲得してきたものなのだろうか。どのような場面においてより発揮されるのだろうか。そのことで子どもはどういう効果を得ているのだろうか。それらの内容は三種類の信号行動系の発信・受信の内容を詳細に観察することで評価が可能になる。コミュニケーションの基本的過程 (I 報, 図 II, p26, III 報, 図 1, p34) で子どもと子どもをとりまきまわりの人たちとの関係をおさえる。その場に

おける子どもとの関係の評価をしたときに、子どもとの間でコミュニケーションが展開している「人」を見つける。その上でその「人」とのかかわり方の内容をみでみる。関係改善の手がかりがそこにあるとみなすのである。しかし子どもとのT信号行動系に至るまでの過程、即ち距離ゼロにしてみようと動いてみてもなかなかその間が縮まらない場合は、接近過程の種類の密接型以外のタイプに類別されるということになる。これは、子どもの側の条件が満ちた場合と、保育者側の条件が満たない場合に類別される。後者は、子どもの信号行動系の受信以降の段階の未熟さだとおさえられる。

とりまとめると歪みの問題を見る手がかりとしては、子どもの行動（信号行動系の発信・受信）をよく見ることである。行動を見てみると、その子どもがそうならざるを得ない結果として、見つけてきた行動群を示していることが多い。どのような行動様式を身につけてきたのかということを日常生活の動きの中から推察する。今、この場で出会っている子どもと自分との間でおさえることのできるコミュニケーションの内容から、歪みの中味について推察する。母親との間に歪みをより多く見出した場合には、どの場面でより多く出しているのかという視点でみでみる。場面での問題解決法を考える。

表1は、接近過程の類型にみる信号行動系の特徴である。関係の評価の手がかりとする。

子どもが発しているA信号行動系からみることは、その使い方だけではなく、発音、プロソディー、文章構成能力、長さなどがコミュニケーション場面で生きているのかどうかという点にある。内容が未熟であっても、人に向かって出しているならば、その子どもは精一杯出しているとみなせる。一方、量としてもよくしゃべっているが、(Johnson¹⁾のことばの内容の姿勢でかかわっているつもりで一生懸命その内容を聞きとめていても、) なんだか気持ちが伝わってこない、という場合がある。或いはことばそのものにとらわれてよくわからなくなってしまうという場合がある。ことばをよく聞きとめるということが、その子どもに位置づいていなかったのではないかと思われる場合が多い。即ち受信するというしくみについての理解不足、或いは未熟とみなせる。これは人との距離が遠かったために（といってもよいと思われる）とびかっていることばの内容やプロソディを習得しそびれたとみなせるのである。しかしながらA信号行動系は見えるものではない。受信者である私たちの姿勢や見方の未熟さ故にまずい評価をしてしまうという可能性もある。それを多少なりとも修正するものとしては、V信号行動系をみる。子どものV信号行動系については、視線をそらすことや目をギュッとつむることなどのように、相手の人との間でV信号行動系交信を、いわば断つような行動様式を身につけていることが多い。目をおおっていて見ないようにするということがある。V信号行動系が人に向かっており、その方向がはっきりとわかるならば、歪みの問題は小さいとみなせる。両者の関係の評価としてはその子どもとの間は上記の例よりは近いとみなせる。さらにA信号行動系に関しては、耳の聞こえが生物学的能力があっても聞こうとしないようにする、ということがある。従って、このような三種類の信号行動系の用い方をしていると、当然のこと乍ら、聞きとめることで言語理解力が高められることや言語習得過程につながっていくということはない。

子どもの発達助成のプログラムとしては、子どもとまわりの人とのかかわり方の内容から子どもとの関係を推察する。相手が大人の場合には、A信号行動系の使い方をみでみるとよい。子どもに向かって、どのようなことばを話しているのか（その内容）、話すタイミング、間のとり方、スピード、一度に話す量などである。受け手としての子どもに、い

表1 接近過程の類型にみる信号行動系の特徴 (佐々, 1986)

接近過程の類型	信号行動系		V 信号行動系		A 信号行動系		
	T 信号行動系	表情・視線	体の動き	保育者に 向けての動き	発話量・ピッチ・抑揚・トーン テンポ・泣き方・話し方の特徴	発話に対する 反応・理解	保護者に 話す内容
遠方定置型		表情の変化は少ない。口は固く閉じている。平坦な顔つき。 視線は合わない。または、合うとそらす。	部屋のすみにいることが多い。 体の動きは、少なく、硬い。	背を向けている。 視野に入らない場所にいることが多い。	発話量は少ない。 ピッチは高い。 抑揚はない。単調なしゃべり方。 テンポは速い。 小さな声で話す。 泣くことは少ない。	呼んでも、ふり向かない。	ほとんどない。
AV 振幅型		はばをひきつた様に上げる。 横目で見える。 視線が合うと伏せる。	体の動きは、少なく、硬い。	対面型	発話量は、やや少ない。 ピッチは高い。 抑揚はない。 テンポは速い。 キーという声・大声をだす。 声をださずに泣く。	近距離 (2 ~ 3 m) で 2 ~ 3 語文程度の文章をゆっくり言うて理解する。	日常のできごとなど 1 ~ 2 語を言う。
V 振幅型	肩をさわわるなど、横、後から近づくことが多い。	不快の表情はまゆをしかめる。目玉を左右に動かす。 視線は時々合う。合うとそらす再び向ける。	肩に力を入れる。 体を左右に動かすことが多い。	保育者の前・横 1 ~ 2 m を行き来する。	発話量はやや多い。 ピッチはやや高い、上ずった声。 テンポは速い。または遅い。 息つきが多い。どもることがある。 感情表現は乏しい。 高くかばるような声をして泣く。	1 m 前後で、ゆっくり言うて、理解する。 「なに？」と聞き返すことが多い。 強い口調で言うて、体の動きが止まり、話さなくなる。	できごとの報告。 「～ななに」「ないに」などの質問をする。
VT 振幅型	腕・足にしがみつくと。 抱っこ・おんぶがみられる。 45cm 以内に入るとまでに時間がかかる。	快 (喜び) の表情が増える。 視線が合うとが増える。	快・不快に伴い、動きが活発になったり、止まったりする。	ぶつ、けとばす、かみつく、ひっぱることをする。 おどける、ふざける。 ぶつた後、走り 1 ~ 2 m 離れたところへふり向く。 保育者の持ち物をさわわる。 視野内にいることが多い。	発話量は多い。 ピッチはやや高い。 抑揚がでてる。 テンポは速い、または遅い。 甘え声、赤ちゃん言葉、つぶやき、乱暴な言葉、語尾を短く切る。または伸ばすなどの話し方をする。 泣くことが増える、長泣きをする、大声で叫ぶ様に泣く。	反応は早い。 「いや」「やりたくない」などのことばが増える。	「いやだ」「～しなさい。」「だめ」「こっちにきて」などの、自分の気持ちを表現するところが増える。
密接型	正面から走ってとびつく。 強くしがみつくと。 正面 45cm 以内にいることが多い。	喜怒哀楽の表現が増える。 視線は合うことが多い。	身ぶり、手ぶりを多く使って感情表現する。		発話量は多い。 自然な口調。 泣くことが減り、言葉で表現する。	よく理解して行動する。 聞いて、感じたことをすぐに言う。	感じたこと、思っていること、考えたことを表現することが多い。

わば無視しているかのように発している場合には、その子どもとの間で、そのままのかかわり方を続けるのなら関係が密になりにくい。このような人たちには名キャッチャー、名ピッチャーへの助言を具体的かかわり方の提示をもってしなくてはならない。その前に臨床者としてはまず関係の評価ができることと自らがさまざまな“ことば”（信号行動系）がかわされる場合の、タイミング、間のとり方、スピードなどについて、感覚的にとらえられることが重要である。どのようなタイミングであれば、きちんと受けとめられるのか、やりとりの間としてはどのような間ならよいのか……。これらがわかるということはコミュニケーション過程の良いキャッチボールのしかたの内容がわかっているということに他ならない。

Ⅱ. 人間関係の育ちそびれと歪みの修復についてのかかわり方

人間関係の育ちについては、上述に分類したように未熟と位置づけられる育ちそびれと歪みの二つのタイプに分けられる。その分けられるタイプによって、修復についてのかかわり方についても方法論（技法）が異なる。

前者、未熟なタイプについては、発達の育ちそびれとして、乳幼児がその人間関係の発達過程を段階をふんで一つひとつを経ていくように、その子どものもてるやや弱いであろう、生物学的要素とからませながら、かかわる側の人間関係の要因によって、その子どもの発達ベクトルを変えていこうとする動きをする。暦年齢が高くなっている分だけややむずかしさがあるが、人間を、いわば避けるというような行動様式をまだ身につけていないと思われる分だけかかわりやすい。乳児がその過程で関係の絆を育んだように、距離ゼロに近いところ（Tゾーン内育児）での細やかな交信をくり返して丁寧にかかわっていくことである。

1. 乳児の場合

母子関係の形成過程にみる「抱くとおさまる」がどの人々の間でもみられない場合には、第一期の模索期とみなす。かかわり方の方針をたてる目安としては、子どものを三種類に分類する。即ち、人間関係の展開における、1) 促進型、2) 不定型、及び、3) 回避型である。かかわり方としては促進型は state 3, 4 から人間関係の質的転換を目指すことにある。不定型は、交信過程の信号行動系から子どもの states の変化をとらえることから始める。Tゾーン内でT・V信号行動系の内容を詳細にとらえながら、保育者との交信の接点（おさまり方）での一番よい方法論を見出すことにある。回避型の子どもに対しては保育者を回避することになるために、両者の間柄はますます縮まらない。Tゾーン以外での子どもの states を観察することから始めるが、保育者との交信過程で、比較的回避反応の激しくないかかわり方における保育者との距離—信号行動系の内容の分析をした上で、保育者との接点をできるだけ早急に見出すようにする。乳児においては、おおいひもでのおんぶ（T交信の条件を満たしている）を時間をかけてすることから、子どものT信号行動系の応答を受けてみることも一方法である。子どもの信号行動系を細かくチェックしながらかかわらなくてはならない。とりわけ、初期においてはTゾーン内交信過程での、子どもの信号行動系の総体による受信・発信によって判断する。目指すは第二期接触体験期

であり、両者がくっついていて安定していることにある。

変化の評価は、保育者と子どもの人間関係の成立を目指した交信過程の蓄積で人間関係の成立段階をみることになる。人間関係の成立段階は、母子関係の成立段階に対応する、母子関係の形成過程における乳児の行動の変化の内容はⅡ報 表1 p.17になる。段階をふんでいくことで両者の質が高められるということになる。

2. 人間関係の歪みの子どもの場合

一方の人間関係の歪みの子どもの場合には、まず第一に「人」そのものが大丈夫な存在であるということをわかってもらわなくてはならない。子どもが、いわば人を避けるような行動様式を身につけたのはそれまでの経験によろう。V信号行動系については、目に関することでは、おそらく見つめられることで恐怖感、A信号行動系については、耳に関することでは、おそらくまわりの人や物音に対する恐怖感があろう。それらの解消の手だてを子ども自らが模索して見出した内容が、見ないようにすることや、聞かない、聞こえないようにすることであったというように思われる。子どもたちの行動特徴として示される内容の訳はこのように考えられる。

従って、このような歪みのタイプの子どものたちには、まず第一にその子どもの恐怖の源をさぐることで、その軽減をはかることになる。その原因が自らの発信行動内容と関係する場合には、声を低めることや突然の大声を出さないこと、目をじっとみつめないこと・・・などのかかわり方の内容を変えていくことになる。日常のコミュニケーション場面をふり返って、子どもが恐怖感を抱く、或いは萎縮するような場面ではまず、私たちの側が行動変容を行うということである。そうすることで子どもの側に固まっていたものは、気持ちのほぐれが生じれば、徐々に私たちの出す交信内容に向くことや向かうことが生じてくる。それらが見出せるようになることは、関係を育む出発点に立つことが可能になった、ということになる。そこから始めるのである。人間関係が歪んでいただけにその関係の修復はむずかしいが、それなしには良い間柄は育めない。この両者の関係の改善なしには、ことばのキャッチボール体勢ができない為に言語習得過程にはつながってはいかない。関係の改善は子どもの身につけてきた行動様式を手がかりとしてそれを取り除くことからということになる。その上に、人間関係の成立段階をふんでいくということになる。両者の接点、人にくっついていて安定することから「改めて」そこから「人間関係を育む出発点にたてる」ということなのである。

かかわりがうまくいけば子どもたちの変化が見出せる。ここで遅滞児らの人間関係の変化過程にみる視点をおさえておく。

I ; 位置の変化と接近過程：V・T信号行動系

①位置の変化；向きが変わること

位置の変化；向きが変わること、(相手のボールを受けとる体勢、受信体勢を整えることができたと思わせる。)

②接近過程；向かうということ

遅滞児らの人間関係の客観化としては距離—信号行動系からみた接近過程の類型で把握する。遅滞児の事例でみる(表2)と、向きが変わってから、向かっている。向かうまでの道のりは、出会ってから15分程度のこどもから、4年半かかった子どももい

表2 Mちゃんとの接近過程と人間関係の成立段階 (1991) *

段 階	Mちゃんとのかわり		時間的経過	接近過程の種類	人間関係の成立段階
	Mちゃんのような	Mちゃんのかかわり			
1	その場にたちつくす	体がこわばり、目を大きく見開く。その場に立ちつくす。目を見開き、まばたきをしない。	初めての出会い 初めて訪問		I 模 索 期
2	私から離れる、後ろ向き姿勢	私から8mほど離れた場に後ろ向きを向く。ときどき、体の向きを変え、私の方を見る。		遠方定置型	
3	私を遠くからみつめる。前向き姿勢	私の近く(2~3m)まで寄って、私が目を向けると走り去り、10mほど離れた場に居る、目が合う、伏せる。	2~3ヵ月後	〃	
4	少しずつ近づいてくる、私を観察する	3~4mのところまで近づき、イスのまわりをグルグルする。「アッラッ」と見たり聞いたり、返す。はきはきと聞かせる。	1年半	振 幅 型	
5	近距離(1~2m)に居て、私を観察する、距離が近づくと	「これ何?」と本の中のものを指して聞いたり、TVや体験したこともしる。なにかでわかったこと、返して話しかける。	2年目	〃	
6	私を探索する	私のすわっているイスを取り出して、私の持ち物を見る、話をする。さわる。	3年目	〃	
7	私を十分に探索する	たたき、ける、かむ、ひつかせにひつかせる。ひつかせに力をつける。力は弱まり、私の反応を確認する。	4年半め (→1ヵ月継続) (→1ヵ月半継続)	〃	II 接触体験期
8	私を受けとめる	私のいうことを聞きとめる。私との距離は0~1m以内。		密 接 型	III IV 共有体験期 弁別不安期
9	私を自分に引き寄せる、体験を共有させる。	本のある場に行き、本の質問をする。外行動について行かせた。その場で見たことと体験したことを話し、私の話を聞きとめる。		〃	V 安 定 期
10	私から他の人へのひろがり				

(注) * 佐々 (1986) の内容を再構成

る。視覚的信号行動系によるやりとりによって子どもが探索に出かけてくるさまを示している。子どものそれまでの人間関係の育ち方によっても接触までの時間が異なる。

子どもたちとの具体的な場面での臨床者の気持ちについてありのままに記述したものは資料(1~6*)である。そのときどきにかかわっていた筆者(臨床者)が何を思い何を感じていたのかということ(コミュニケーション過程そのものとする)やそのときどきにどのような判断をしていたのかということを示例から示してみた。かかわり方の具体例であろう。また、そのプロセスを人間関係の変化過程としてながめることも可能であるとおさえている。両者の関係の評価の検討材料ともなろう。資料2は、前述のMちゃん⁵⁾、資料4はまこちゃん^{14),15)}、資料5はしんごちゃん²⁾、資料6は、ゆうちゃん^{14),15)}として事例報告をしている。事例報告では通常記述しない内容は臨床者たちの「思い」である。その中味があってこそ(コミュニケーション過程④~⑨)の事例報告になると言えよう。

遅滞児らの人間関係の変化過程にみる視点

II; A信号行動系と準言語面などについて

- ① A信号行動系、いわゆる話しことばに変化がみられる。発達の遅れのこどもの場合にはことばの量や文構造、発音のこどもの場合には、問題の発音の習得、どもり症状のこどもには、その症状の改善がみられる。
- ② 準言語(para-language)面があげられる、声の調子、声の質、大きさ、ピッチ スピード、トーン イントネーション、アクセントが変化してくる
- ③ その他の面として、やりとり行動(交信過程)における間やタイミングのとりかたが変化してくる。これは、いわゆる、キャッチボールにおいて“ゆとり”がもてるようになったということを意味している。このやりとりにおける間やタイミングは、教えられることがらというよりも、子ども自身がやりとり過程の中から学びとっていくものである。①、②の変化も嬉しいことであるが、この内容の変化は、コミュニケーション過程の基本が学べたということなので、人間関係が変化したという最も大切な視点である、と言えよう。

変化の現われかたについては、ひとによって違うが、その子どもの変わりやすい面から変わっていくように見受けられる。③の変化がみられるようになってからが、いわゆる言語治療の系統的な方法論を受けとめられる状態にあるとみなせるのではないかととらえている。③を経てからの、①、②と③の段階の前の①、②の現症の違いについてみてみることで、人間関係とことばとの関係についてがより明確になろう。言語の問題で相談に訪れるこどもたちの変化の評価については従って、①~③までについてしっかりとらえておくことが求められるということになろう。

III. 関係展開への志向と交信展開の技法

1. 関係展開への志向

人と人がかかわりあうとき、そのかかわり方は何種類もある。人がその時その場で考えながら行なう場合でも、人それぞれのかかわり方は違うものである。ほとんど無意識に

* カットの絵は、白梅学園短期大学保育科卒業生、大金孝子に依頼した。

行なっている場合には、どのようなことをしたのかということさえも覚えがない。臨床で出会うときには、その子どもの問題に対して、どのようにしていくのかという方針がたえられる。その方針に沿って、その場でのかかわり方を考えながら行なうことになる。人間関係に問題があるとみなした場合には、私という、ひとりの人間と子どもとの間の回路（コミュニケーション回路）が、いわゆる治療場面となる、治療する“私”という見かたではなく、私と子どもとの間において交わされている、信号行動系がどのようなになっているのか、（発信者の出し方、受信者の受けとめ方、その流れのさま、それぞれの段階の機能）について把握することから始めることになる。関係を変えたいと思うとき、子どもの側は変わらない。子どもとの間で調整をするのはあくまでも臨床者や大人の側である。

子どもとの人間関係は、その時その場の関係の内容を示している。コミュニケーション過程を細やかに、その流れに沿ってみていくことで、どこに問題があるのかということの推察ができる、ととらえている。そのための第一歩として、自分が何をしたのかということとを“意識化”しておさえること、であり、次に相手の子どもが何をしたのかということとを“意識化”しておさえることにある。手がかりとしていくのは、筆者の三種類の信号行動系であり、コミュニケーションの基本的過程についての考え方である。

瞬時に変化していくものを、一つひとつのできごととしておさえていこうという試みであり、流れ（コミュニケーション過程）をみることで、そのどの段階で問題があるのかということとをみようとするものである。受容～反応選択までのそれぞれの段階における内容をしっかりと言語化できるようにすることが求められる。また、相手の子どもの受容～反応選択までについても、しっかりと言語化していくことが必要である。しかし、コミュニケーション過程をおさえることは、それぞれの段階について、一つひとつがこれであるというような出かたや、出しかたではない。自分のしたことや、相手のしたことを総体として受けとめたときに、それぞれの段階において、あったと思われることを段階ごとに区別しておさえた上で、その時その場のコミュニケーション能力について推察するということになる。

従って、かかわり方を考えていくには、まず、今の自分のかかわり方についておさえてみることから始めてみる、ということになる。自分の行動、子どもの行動を想起しながら記録をした上で、評価してみるとわかりやすい。かかわり方については、いわば自分の“癖”というものがあるのかどうか。とらえ方でぬけているところがあるのかどうか。子どもからの反応から、自分のかかわり方に押しつけ的なところがないかどうか、展開していると思えたところはどこか、といくつもの視点でおさえていくことで評価してみる。

関係修復についてはA信号行動系から導くのではなく、V信号行動系のやりとりからそのきっかけを見出すことにある。つまりことばだけでのかかわり方ではキャッチボールの下手な子ども、キャッチボールがわかっていない子どもには見えないボールはとらえられない。刺激の強いV信号行動系の発信は避けて、相手が受けとめやすいV信号行動系の内容を考える。子どもに向けるV信号行動系発信には、ほんの少しだけその方向を避けてみるとよいようである。子どもが見やすいように、子どもが方向を定めやすいようにほんの少しだけズラしてみるということである。そのためには、子どもから発信しているV信号行動系の一種の、視線はどこを向いているのかなど、その方向をきちんとキャッチすることができるよう訓練しておく必要がある。

また子どもの身近な存在である親のかかわり方を評価をしてみる。問題点について拾いだし、ひとつずつ取り去っていくことも重要な視点である。そのためには、親に求める前に、臨床者の側がその子どもとの間でキャッチボールのコツがわかっていることが大切である。どのようにしたら、やりとりがスムーズにいくのかということを経験していなければ親への助言もかなわない。

関係の変化過程については、先に述べたように、信号行動系のキャッチボールが総合的になってきたのかどうか、向くこと、向かうことの方向性ができたのかどうか、人とのやりとりが量的に増えてきたのかどうかなどについてをみていくことになる。また、親などの子どもをとりまくまわりの人たちのかかわり方の問題点が修正されているのかどうかということも大事な視点となることは言うまでもない。

2. 行動についての見方

行動についての見方を以下のようにみておさえてみる。

- 1) 子どもの示すさまざまな行動は、どのような行動でも、子どもの表現行動であり、その行動には何らかの「わけ」があるという見方をする。(信号行動として意味づける。)
- 2) 私とのかかわりあいにおいて示す子どもの行動は、私とのかかわり方についての子どもの評価とみなしてみる、という見方をする。

例えば私が子どもの目を見る。子どもが目を伏せる、というのは、子どもからのマイナスの評価とみなす、ということである。

- 3) 子どもからの評価を受けとめながら私の行動（子どもに対するかかわり方）を修正していく。互いの行動を瞬間的にキャッチしながらコミュニケーションの連続性の中でよりよいかかわり方を模索していく。その手がかりは自分の行動と、子どもからの反応行動であり、その意味づけをしていくことにある。
- 4) 子どもからの行動をマイナスの評価とみなす場合の手がかりは、表3である。
- 5) それらの行動を手がかりに、子どもとの間柄において安定した状態を保っていくようにすることである。特に表情に気をつけながら修正していくと良いようである。
- 6) 子どものいわば不思議な行動群は、私との今のかかわりかたにおいて生じたと思われる場合でも、何らかの子どもからの意味のある表現行動とみなしていく。その「わけ」について、今の少し前のことがらがそうしてしまったのだろうか、と考えてみることや私以外の人との間から引き起こされたものなのだろうかなどと考える。行動の解釈を子どもに即してすることにある。

3. コミュニケーション過程における交信・展開の技法

コミュニケーション過程における交信・展開の技法としてかかわり方の手順をとりまめると表4となる。距離—信号行動系のうち、とりわけV信号行動系の内容が重要だということがわかる。この内容は対象者がどのような人や子どもたちであっても同様に考えていくことが可能である。関係をつけたい場合には、自らが発信者になることである。視野内に居ない場合などは発信内容が届くような方法、例えば手紙、ファクシミリや電話などがある。

発達に歪みや未熟さが見える子どもたちでも、Ⅰ報からⅢ報までの間にくり返し論じて

表3 マイナスの評価が与えられたとみなすことができる行動の例（佐々，1987）

A 声に関するもの	F 手に関するもの
1. 泣く 2. ウーウーといううなる声を出す 3. キーキー、イーイーなどのピッチの高い声を出す 4. 息づかいが激しくなる	1. こぶしを握りしめて力を入れる 2. 指しゃぶり 3. 腕をかむ 4. 体をひっかく 5. 自分の手で耳をおおう 6. 物を投げる 7. 物を捨てる 8. 相手のほほをつねる 9. 人をひっかく
B ことばに関するもの	G 体の動き
1. 話していたのにおし黙る 2. 「いや」と言う 3. 「ねんね」「バイバイ」「オシッコ」を連発する 4. 口のなかでボソボソ言う	1. 一瞬体の動きを止める 2. 一瞬体を硬くする 3. 体をビクッとさせる 4. その場に立ちすくむ 5. 力む 6. ビョンビョンとびはねる 7. 床にうずくまる 8. 後ずさりする 9. うつぶせになる 10. 足をふみならす 11. すみに行く 12. ゴロンと横になる
C 目に関するもの	H その他の行為
1. （一瞬行動を止めて）目を大きく見開き一点をじっとみつめる 2. 目のまわりの筋肉を固くし、目をパッと見開く 3. 視線をそらす 4. 目をつむる 5. 目を伏せる 6. 目を瞬間すばやくしばたかせる 7. チラッチラツと見る	1. あくびをする 2. 部屋のすみに隠れる 3. 人からスッと離れていく 4. 物に没頭する 5. 今までやっていたことをパッとやめる
D 口に関するもの	
1. 口を固くむすぶ 2. 口を固くむすびへの字に曲げる	
E その他の表情	
1. 表情を固くする 2. まゆをひそめる 3. 額にしわを寄せる 4. ほほの筋肉をひきつらせる 5. 歯をむき出す 6. 笑っているような顔つき	

表4 コミュニケーション過程における交信展開の技法

項目 順位	手がかりとなる見方	か か わ り 方
1	発信のための準備(1)	コミュニケーション関係の「相手」の今ある状況についての現象を把握する； 自分との位置、距離関係、相手の子ども（人）の向きなどの信号行動系の内容
2	発信のための準備(2) 名ピッチャーの条件	相手が受信しやすい信号行動系を選択する 位置の移動、間、タイミング、強さ、量についても考慮する。
3	発信・受信の役割と交換過程 （いわゆるキャッチボールのしくみ） コミュニケーションの基本的過程(1)	自分の発信内容を意識化した上でV信号行動系を発信する。相手の受信内容（信号行動系）をきちんと受信する。それらを評価として受けとめ、次なる発信時の調整材料とする。
4	V信号行動系による交信(1) 向くこと	相手が自分の発信内容を受けとりやすい位置へ移動する。相手の視野内での交信が可能かどうかを見極める。（向き合うことが可能かどうかの判断）
5	V信号行動系による交信(2) 向かうこと、接近過程の類型	相手の接近過程の類型を評価した上でかかわり距離が縮まるかどうかをみ定める。相手から見て楽な位置、距離を見出す。
6	コミュニケーションの基本的過程(2)	相手の発信内容を取りわけきちんと受容（④）した上で、一段階ごとに経ていく。ゆっくり丁寧に反応を受けとめながらかかわる。

いるように、基本的には一対一の個人間コミュニケーションでおさえしていく。その過程において両者に交わされる信号行動系の発信・受信内容が両者の間柄を切断や展開の方向に導く。その選択決定権はコミュニケーションの対象である子どもの側にある、とみなしていく。評価を受けとめながら私たち大人があくまでも調整しながらかかわっていく、ということである。

かかわる対象者によって細分化すればその技法も異なってくるが、言語習得過程の第一期をコミュニケーション関係の成立期と考える筆者の立場としては、相手の子どもの示す信号行動系発信の受信以降の過程（④～⑨）の内容によるということになる。即ち、保育者側の読みとり能力を軸に判断することであり、また選択対応能力で質が問われるということである。

質の高いかかわり方が実践できるようになるステップとしては、別に、発達助成論^{12) 14) 16)}としてまとめているので参考にされたい。

資料1

特別席でシンフォニー

丸い顔で丸坊主。まんまる目玉のAちゃん、お母さんに連れられて部屋にきた。

あらら、どこを見ているのかしら。

困えは外向き。トットコトットコ走り出した。

その速いこと。私が追いつくには大変。

「おいていかないでよー。」

聞いてくれるわけもないことばを言いながら、やっとの思いで追いつく。

さわらせてくれるのは服の背中の真ん中の一部分だけ。つかみながらAちゃんのスピードに合わせて走り続ける。

行き先はどこ？

着いた所は校門を通りぬけた、車の通りの激しい道路。ダンプカーやバス、自動車が、次から次へと通りぬける。

Aちゃんは、ガードレールの外側1mに、胸まで道路につけて両手で顔を支えている。危ないなあ。大丈夫かなあ。

私は、Aちゃんの外側で同じ格好になる。

でも、私の存在など目のはしっこにも入っていない。どこ吹く風。

まあ、いいか。

ここにしばらく居るみたいだから。

目の前5m先には横断歩道。

タイヤの何と大きいこと。つぶされそう。

「大丈夫ですか。」

自転車の人が立ち止まって声をかけてくれる。

「ええ。」

何人もの人と対話する。

Aちゃんはあの格好のままじっとじっと。

そのまま見入っている。

危なくないから大丈夫。公衆道路占拠など、堂々としていれば大丈夫。

私はAちゃんになりたくなった。

徐々に周りが見えなくなった。

そのうちに音がどんどん入ってきた。

グアーン。スー。シュー。ピッピ……。



リズムがある。

音の大小、さまざまな、細やかな音も入る。

音の高低やざわめきも。

徐々に静まる音。高まる音。

突然のフォーン。

あらら、オーケストラのシンフォニー。そして、ここは特別席。

素敵！素敵

音に包まれてふわふわ浮いてきた。

今度はどんな旋律が流れるのかしら。

我を忘れているときに、視線を感じてふり向くとAちゃんの目とぶかった。

Aちゃんとの間にも旋律が流れている。聞こえる。聞こえる。

息吹が、音が、生きづいている。

都会の中の青空・自然会場のシンフォニー。

奏でている人たちは、音を作っているとは知らない。

聞いている私たちだけが知っている。

オリジナルコンサート。

響きがこだまし、音が、心が踊り出す。

近くのくいに席を移動。膝に乗せて鑑賞する。

「耳を澄まして聞こうね」

終楽章の旋律は帰り道。

手と手との間に通いあいの音が流れる。

別れの時に静かな幕。

今度はどんな会場でのコンサートかな。

また素敵な席を教えてね。

資料2

サイダーパンチに乾杯

「サイダー、サイダー」隣の部屋からBちゃんの大きな声とドストドスンという音が聞こえる。母親との話を打ち切って見に行くと、鏡の前で跳びはねながら叫んでいた。

私たちを見ると、私たちの方に向きを変えて、さらに叫び跳びはねる。「とばないのよ!」と母親は強く言う。

マンションの三階では階下に響くし、この間も小言を言われたからと。

サイダーが欲しいと言っているのだけれど、息使いを荒くして跳びはねながら叫ぶBちゃんの姿は、さながら冷えたサイダーの栓をぬいた時の気泡にも見えた。

これではしばらくは止まるまい。すぐに買ってあげることだけがいいわけではない。おさまるまでのやりとりをしようと思いついていくことにした。

ドンドンの音が鎮まる。私に向かってこようと構え、立ち止まりを繰り返す。心のジグザクそのまの姿がそこにある。

目線をタンスの上に向けたとたんに、走って行って大きなブタの貯金箱を両手に持って勢いをつけて下に落とそうとする。

「アッ! ダメダメ、ダメー」と母親。「危ないよ。ブタさんが…」と言いかけると、私の方をじっと見つめてまた繰り返す。

今日は綱引き、オーエス、オーエスって、勝ち負けのないぶつかりあいの綱引きかしら。物は、次に買物袋、財布、お金への経路をたどっていく。

私たちの反応から、一つひとつをおさめている。大丈夫かな。そんなにおさめていつて…

パッと走って棚にあった時刻表で私の頭を素早くたたきだした。一秒に二回くらいの強烈パンチ。あの勢いをおさめた分だけ、きつと出て来るだろう。

それにしても痛い。どのくらいでおさまるのだろう。三十…九十…百…確か二百回以上はあったようだけど、頭がぼんやりしてしまつて数は覚えていない。

止められなかった。Bちゃんが人に本気になつてぶつかったのは初めてだから。それに、今日の綱引きでおさめていたエネルギーの貯え。今「私」に向かって来た。受けとめるしかない。

それからの訪問日は、私の周囲1mがパンチの嵐の圏内になった。

たたく、蹴る、咬む、引っ張る。これはアッパーカットかキックかパンチか。強烈パンチが突然に飛びかう。体中があざだらけになった。

受け身で少しずつパンチのきつかけがわか

るようになった。殺気も1m先から感じられる。

アッ、来るな。では、ハイ、キャッチ。

受け手、かわす身のこなしに、目を見開いて見つめる。ね。上手になったでしょう?

そして、それからはパンチはゆっくりゆるく弱くなつていった。

「先生、たたくといたい?」

「うん、いたーいの」

Bちゃんの手をそつと握つてお返しパンチ。ギュッと目をつぶつて見つめ返す。

見つめあいの中からの対話になった。

仲よくなる道はかなり遠くて険しかった。六歳七か月に会つて四年半かかっているのだから。

サイダーは、私への(痛味)ビター味。でも、喜びにつながる嬉しい味。では今一度、仲よし道へのサイダーパンチに乾杯!



資料3

一分は百五十秒

小四Cちゃんは学校でさまざまないじめにあっていた。弟の小二のDちゃんは読書以外はやるきを起こさないという。家での子どもの様子をみるために訪問する。

部屋に入る。奥からCちゃんがやってくる。小さな声で「ね、せんせい、青虫好き？」「青虫って・・・」あの虫のことかなと考えていると、目の前からいなくなる。まもなくCちゃんの右手には木の枝が。私の目の前にギューッと差し出す。鼻先までくる。視線の定めようがない。よく見ると、目の前5cmのところは一匹の青虫がうごめいている。体長は7cm程度、何てステキな色。輝くような黄緑。そして太つちよでニョロつとしていて、モゴモゴ動いている。思わず見とれてしまった。そしてその時とても不思議な空間に入りこんだ感じがした。子どもたちがじっと私を見つめていた。「ステキね。」と目くばせ。青虫と子どもたちと私。静かな時が流れた。いつも比較的失敗感を感じていらしいDちゃんにテストを用いてみることにした。「やれる」と本人が思える体験づくりとしてやってみようね。

ゆっくりテンポですすめていたら、どのテストものりがいい。向かってこようとする気構えが伝わってくる。「Dやるじゃないか」

と兄。まんざらでもなさそうな弟。次の課題を待ち構えている。

抽象的な図柄が描いてあるチップを並べ、見本のとおりにならべてみる課題になった。ブツブツ言っている。「これは・・・で、これは・・・で」。聞きとりにくい小さな声。どうも一つひとつを命名して筋書きを作っているようだ。ミニストリーがひそやかに語られている。これでは決められた時間内では測れない。測るまい。本人の納得のゆく「時」をきざんですすめていくことにした。

「はい、次はこれね」と五枚、じっと見つめる。物語が作られていく。間違いが無い。順々にやり終えて最後の十枚になる。やりきった。晴れ晴れとした顔だ。一回の時間は二・五倍、一分は百五十秒の勘定だ。

こういう対処の仕方なら、世の中のテンポに合うわけがない。時間が子どもを駆り立てていく。そして、そこで、その子の「実力」



が決められていく。このDちゃんなら落とされていくのみだ。考えている「ひととき」がバツバツと切られてしまう。その力は、出ないまま、その上、個性のみじんも感じてもらえないまま。・・・何ということだ。同じようなことがいたるところにあるような気がする・・・。

人にはその人なりの「ひととき」のすごしかたがある。そのひとときを工夫して楽しめることほど素晴らしいことはない。なのに一般には一定のものさしだけで測っている。それでわかったつもりになっている。

青虫がその個体のもつ「時」を十分に経て蝶になっていくように、ひとりひとりの子どもにもその「ひととき」のかけかた、過ごしかたがあろう。DちゃんのブツブツことばはDちゃん国への案内版。そして時のテンポが道のりを示してくれた。ゆっくりたどっていつていざなわれたところは、あたかも一面さわやかな風の吹く高原。私もそこでひやかな気持ちになった。また、語られた物語は豊かな子どもの世界の一部をみせてもらえたように思えた。たくさんのお話をありがとう。

Dちゃんは、高校一年生から休学。アルバイトをやりながら自分の生きかたを模索しているという。十分の「時」を経て、はばたくのはまもなくだろう。

資料4

ダンスへの招待

変化がみえず、いろいろと奇妙な動きもするようになったと、二年ぶりに訪れたEちゃん。二卵性双生児の兄。部屋ではキーキーというピッチの高い声を出しながら、ピョンピョンはねる。体を前に折り曲げて両手指に力を入れながら一本ずつ折り曲げていく。つま先でチョコチョコとす早く歩く。視線は上向き。人の顔をかすめて天井に向かって一定のリズムを持っていくようにも受けとれるが、よくはわからない。テンポが速くめまぐるしい。

これだけのキーの音。体を折り曲げる力。全身からの叫びのように見えるけれど、助けを求められているのだろうか……。困っているのよね。見守っている私はどうしたらいいのかしらと、どんどん辛くなってくる。それは緊張しているのだから、どうしたらいいのか困っているのだから、その子どもの気持ちを鎮めるように動くことだという。すがるとすれば、これしかない。

一週間後に再び出会う。今日試みてみよう。音がひびかない部屋にEちゃんを導く。つま先立ち、上向きの視線……。同じ動きが見られる。私は壁を背に坐る。伏し目がちにしながらチラッとEちゃんを見る。あら、窓から外をながめている。あ、私に気がついたみたい。あわてて頭をもとの位置に定める。視線を床に落とす。私の前をEちゃんを通る。

1mほど離れている。部屋の角の方でチラッと私を見る。(と思えた。)部屋の角から私の方に視線を向ける。(と感じた。)あら、また動きが、私の目の前をツツツと小走りに、右前方1.5mのところで止まる。足をペタンと床につけている。あら、足がついている……。

五分たつただろうか。目の前50cm前方床に視線を落としながら全身でEちゃんの動きを感じてみよう。アンテナをはりめぐらせてみる。ピッピッピッ……。静かな中から動きが見えてくる。あれ、ピッピッピッ……。Eちゃんからのシグナルが伝わってくる。入ってくる。ドキドキしてくる。これは何だろう……。と思ったとき、力をこめて私の右肩をドンとたたいてEちゃんがサッと立ち去る。とび立つ鳥のようにスッとなくなる。見ると左ななめ前方1m半のところに居る。ななめ下にいる私をとらえているようだ。ぶつかった時の肩の感触が鐘をたたいた時のように余韻としてひびいていく。その音色にひたっているとEちゃんは私の左肩をドンとたたいて立ち去る。ひびきがドンととびこんできた。ひびく音が違って聞こえる。何て不思議。心の中でこだまが繰り返される。

四方に向けているアンテナから次々と情報が入ってくる。ドキドキ。あれから五分。Eちゃんは両足をペタンとつけて歩み寄ってくる。ドキドキが高まってくる。そっとそっと近づいて床に両手をついて私の顔をのぞき込む。目がピタリ合った。

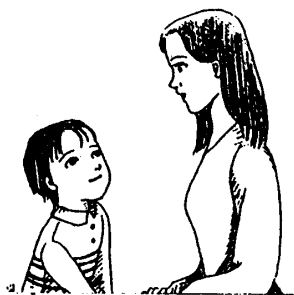
胸の高なりが早くなり、顔に血がのぼるのがわかった。「ね、どうしたのそんなにおびえて。大丈夫だよ、大丈夫。」Eちゃんの目のことばが語った。なぐさめられているのが私になっていた。これは逆転の現象。

Eちゃんに映っていた私は、さしずめ壁の花(?)。初めて訪れたダンスパーティーの席で困っている女の子。「大丈夫そんなにおびえなくても」と、誘いのサインは勇気づけ。それでもなかなか変わらぬ姿にそっと手をさし出してご招待。

「さ、お手をどうぞ。(大丈夫、大丈夫) ぼくと一緒に一曲いかがですか?」

見られていたのは私の方、見ていたのはEちゃん。そして気持ちを鎮めてくれたのも。静かな静かな動きの中で一つのドラマが始まり終わった。かかわれなかったのではなくて、ひそやかな中でひびきを聞いて向かい合えた。そして心が穏やかになっていった。Eちゃんももち備えていた。

ダンスの招待は受けられる人でありたい、そして共に「Shall we dance」を。



資料5

一服してホッ

目はパッチリとして色白で、人形のようなFちゃんは三歳半、初めて会ったところにやっとなつてきたという。申し込んだときに送られてきた「母親への手紙」をみて子どもと一緒に遊んだり、積極的にかかわったりしてからだという。指さした方向をゆっくり（五秒程度たつてから）見るようになったこと、目は時々合うようになったこと、などが報告されていた。発語はない。

1m離れた母親に背を向けて電車のおもちゃをさわっている。声ひとつ出さない。視線は下向き。静かな部屋におもちゃの電車をさわる音が聞こえる。やおら向きを変えて母親のところへ突進し、胸をまさぐり乳房を取り出しチュートチュと吸い出す。十秒。パツととって返して元の電車をさわる。先程の動きと何ら変わることはない（ように見える）動きが繰り返される。五分程たつて乳房へ。電車をさわり、そして乳房へ……。この光景はとても不思議な世界をかいま見ているようだった。

乳房行きと吸いつき行動はFちゃんの中の内的変化の表れ。何が起こつて何が向かわせ

るのか。あの直接的行動は何を語っているのだろうか。表情からは読みとれない。はつきりしている動きから何とか推察するしかない。

乳房はステイション、痛んだ気持ちに癒やされる。ホッと息つく休みどころ。でも、母親は？

いえいえ、その前に、Fちゃんの気持ちをみてみよう。Fちゃんは「ね、お母さん、ボクね、お母さんのオッパイを吸っていると、こわいことがなくなるの。だからね、オッパイを吸わせてよね。母さん、母さんといわないけど、オッパイあるからここが好き。オッパイあるから落ち着くの」

母親には十分に受け止めてくれるようにお願いする。母と子を繋ぐかけ橋だから、と。子どもはどこで、どのような場面で、どのような事柄がいやで、こわいと感じるのがわかり辛い。表情からは読み取れない。でも、オッパイにきたときは、確かにこわいが増えたとき、そして、それを癒やしにくる。きてくれるからありがたい。それ以上増えないから、そこで癒やせるから。

オッパイは安心感の一服剤。一服するからホッとして、安堵の中から外へ向かえる。

「いつでも、ここでお休みよ。母さんいつでも大丈夫。

ゆっくりゆっくりお休みよ。貯え増えたら出ていける。それまで十分お休みよ。

くっついて、ゆっくりとしていいんだよ。十分足りたら歩めばいい。

十分お休み、貯めようね。いつまでも大丈夫。

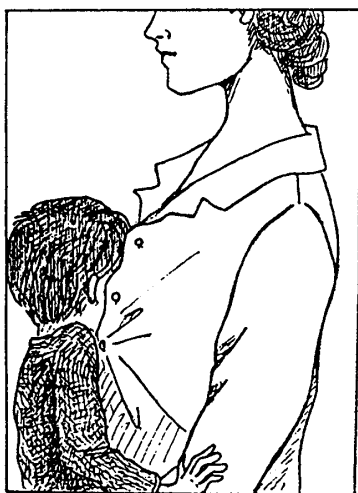
いいと思うまでここにいて、ホッと十分貯めてから、それから、出かけて大丈夫。

母さんがずっといるからね。Fちゃんの母さんなのだから。

十分十分お休みよ。Fちゃんの母さんなのだから。」

乳房が繋いだ母と子の心のパイプは太くなり、母さん軸に広がって、自分の歩みができました。

そして今は十八歳、家が「ホッ」の場になっている。



資料6

カーテンごしに春の風

肥って体格の良い母親に引きづられるようにしてやってきたGちゃんは4歳11か月。生気がなくて、もの静か、淡々とした表情。遊戯室ではじつとしてゐる。この部屋がGちゃんを飲み込んでゐるみたい。部屋のなかのGちゃんは余りにも小さくみえた。

窓の方へ歩いて行く。振り返って両手を上げて、「デビルマン」と言う。弱々しい声。視線はどこに向かっているのかよくはとらえられない。主人公になりきっているのだろう。近寄りがたい雰囲気を感じた。ゆっくりと、静かにデビルマンが動く。

母親の心配は、上の三人の子どもは良く育ったのに、この子だけしゃべらないしハキがない。どのようにしたら、子どもらしい子になるのだろうか、と真剣に問う。

初めて会ったばかりの私に、即答はできない。これからここで一緒に考えていきたいと思います。きっかけはどこにあるのだろうか。Gちゃんは人と遊びこんだということがあるのだろうか。一緒に動くことはどうなのだろうか。でも、どの遊びがいいのだろうか。とまどってしまう……。でも、よし、さそってみるかな。

子どもの背から3mのところから、ドン、ドン、ドン、と軽く音をたてながら小走りに近づく。ゆっくりとふりむく。目は合ったがピタリとこない。カーテンごしの出会いのようだ。ちよつと不思議。またそつとドン、ドン、ドンと音をたててGちゃんに向かう。

「いくよー」。立ち上がったGちゃんは逃げの体勢になり、「タスケテ、タスケテヨー」、ピッチが高くてモノトーン。「まて、まて、まて、まて、まて」小走りでGちゃんを追う。「タスケテ、タスケテ、タスケテヨー」早口で言いながら駆けて行く。クッククという声が聞こえる。私を見ながら身構えている。待っている。

1mは離れているようにしながら動いてみる。それ以上近づいてはいけないような気がした。

「コラ、コラ、コラ」、「タスケテヨー」。部屋を何周しただろうか。十分経過。Gちゃんの顔がこころなしか柔らかく感じられる。顔にほんのり赤味がさしてきた。私も軽やかになってきた。Gちゃんの2m後ろから、もう一度。「Gちゃん、いくよー、まて、まて、まてー」。Gちゃんの動きを見ながら動き方の微調整。キヤッキヤの音が部屋中に響きわたる。追いかけている私もつられて楽しくなってくる。Gちゃんがすべり台でつまづいた。「大丈夫?」Gちゃんを起こしながら後ろ抱きにする。背中をゆつくりゆつくりなでていく。体を私のほうにもたせかけてくる。目が合う。あら、カーテンごしに春の風。暖かい風が私にそよいできた。とても素敵な気分になった。Gちゃんの目はトローンとしている。

よし、よし、よし。いい気持ち。よし、よし、よし、いい気持ち。さっきの追いかけてこよりも、こういうゆったりなのがいい。よし、よし、よし、よし、いい気持ち。ゆった

り、ゆつくり、いい気持ち。よし、よし、よし、よし、いい気持ち。こういうゆったりなのがいい。赤ちゃんに戻ったようだけど、こういうゆったりなのがいい。よし、よし、よし、よし、いい気持ち。これが一番いいんだね。これをやってもらおうね。よし、よし、よし、よし、いい気持ち、を。

Gちゃんに春がくるように、カーテンごしに感じた春が、もつといっぱいあふれるように、カーテンはこちらであけるから、春の風をいっぱい、吹かせて一緒に駆けようね。

まるで赤ちゃん時代のやりなおしのかかわりかたを十分にしてもらった。一つひとつを身につけていくのに時間もかかったけれど、人としての基本は育っていった。



参 考 文 献

- 1 Johnson. W. 田口恒夫訳 (1974), 教室の言語障害児, 日本文化科学社
- 2 佐々加代子 (1982), 言語発達遅滞児の臨床—しんごちゃんとともに—, 白梅学園短期大学紀要 17号 pp 35-50
- 3 佐々加代子, 梅田裕子, 堤由起子 (1986), 保育におけるコミュニケーション関係の成立Ⅳ—Ⅳ, 日本保育学会第39回大会発表論文集 pp 438-441
- 4 佐々加代子 (1988), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅵ コミュニケーション関係における阻害要因の検討, 白梅学園短期大学紀要第24号, pp 47-61
- 5 佐々加代子・梅田裕子他 (1989), 保育における人間関係の展開—子どもとのかかわり—, 白梅学園短期大学紀要第25号, pp 27-34
- 6 佐々加代子, 梅田裕子他 (1990), 保育における人間関係の展開Ⅱ, 展開過程の条件—, 白梅学園短期大学紀要第26号 pp 47-67
- 7 佐々加代子 (1991), 言語習得過程についての人間関係学的研究（言語・発達臨床論）, Ⅰ 白梅学園短期大学紀要第27号 pp 25-42
- 8 佐々加代子 (1991), 発達助成論Ⅱ—ことばのキャッチボール, 日本言語障害児教育研究会 第24回発表資料集 pp23-39
- 9 佐々加代子 (1991), 言語障害, 鈴木健治編, 障害児の育て方 指導法 5章, ミネルヴァ書房
- 10 佐々加代子 (1991) 風の旅シリーズ1～4, 全国障害児をもつ親の会事務局編, 全国心身障害児福祉財団, ことば136-139
- 11 佐々加代子 (1992), 言語習得過程についての人間関係学的研究（言語・発達臨床論）, Ⅱ 母子関係の形成過程と言語発達の関連性, 白梅学園短期大学紀要第28号, pp 35-49
- 12 佐々加代子 (1992), 発達助成論Ⅲ—関係の評価とかかわり方, 日本言語障害児教育研究会 第25回大会発表資料集, pp 37-45
- 13 佐々加代子 (1993), 言語習得過程についての人間関係学的研究（言語・発達臨床論）, Ⅲ ことばが生きるコミュニケーションのメカニズム, 白梅学園短期大学紀要第29号, pp 13-31
- 14 佐々加代子 (1993), 発達助成論—関係の評価とかかわり方(2), 日本言語障害児教育研究 第26回発表資料集, pp 45-57
- 15 佐々加代子 (1993), 言語習得過程についての人間関係学的研究（言語・発達臨床論）, 平成4年度文部省科学研究補助金による研究報告書
- 16 佐々加代子, 中村晃子他 (1993), 発達助成論—基礎演習内容(1)(2) 日本保育学会第46回大会発表論文集, pp 204-207
- 17 田口恒夫編 (1974), 言語発達の臨床第一集, 光生館
- 18 田口恒夫編 (1976), 言語発達の臨床第二集, 光生館

さっさ かよこ（児童学）